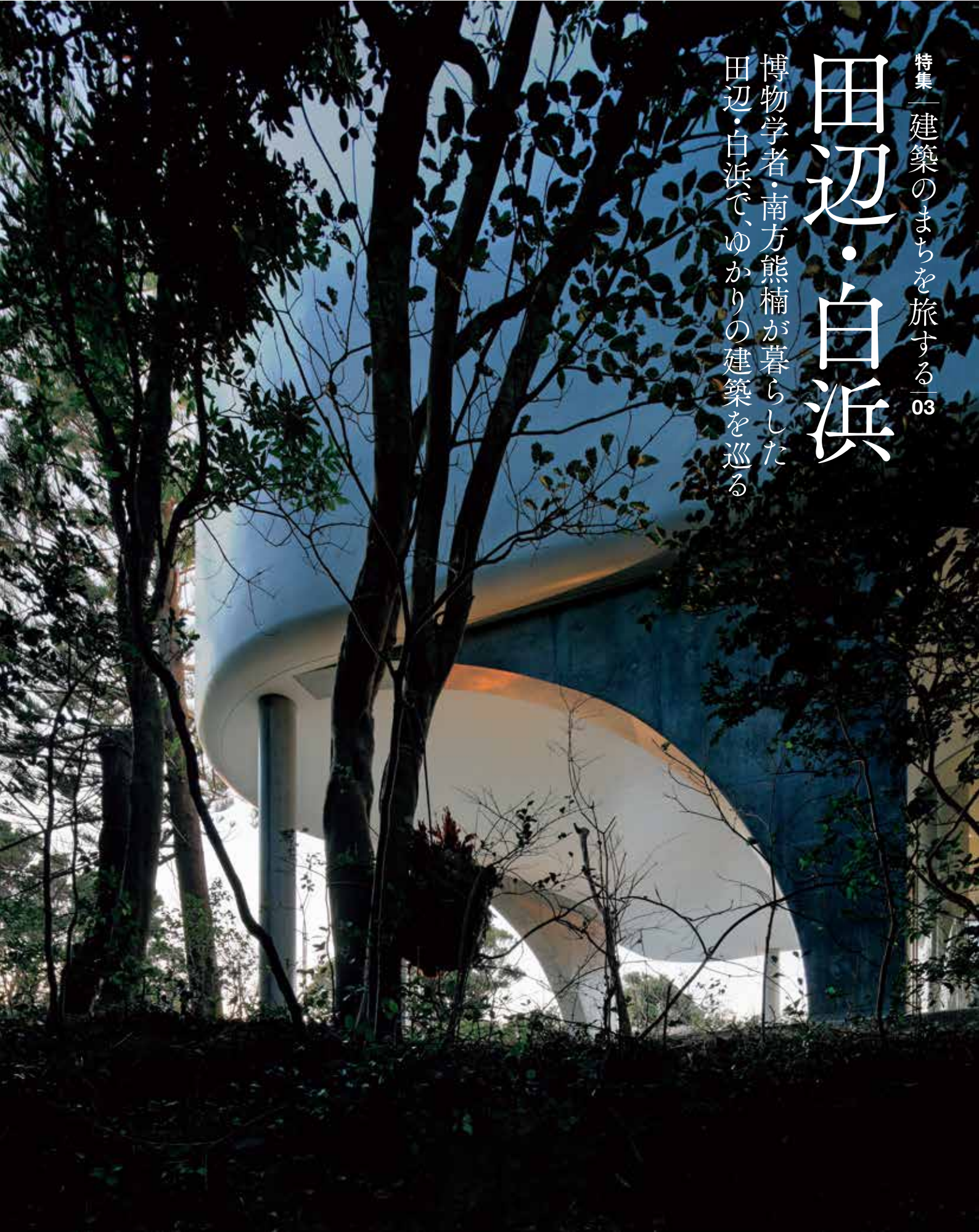


特集 建築のまちを旅する 03

田辺・白浜

博物学者・南方熊楠が暮らした
田辺・白浜で、ゆかりの建築を巡る





表紙の写真

〈南方熊楠記念館新館〉外観

設計 | 小嶋一浩 + 赤松佳珠子 / CAT

菌類のようにぬめり白い躯体が、周囲の樹木の間を縫って、狭い平場に出現したような外観。強い潮風に耐えるためのコンクリート躯体は、その配置や形で人工物と自然の関係性も示している。万物の関係性を問うた熊楠思想の拠点に相応しい

【写真:石田 篤】

左写真

〈南方熊楠記念館新館〉

エントランス吹き抜け

テキスタイルデザイン・製作 | 安東陽子

1階中央の吹き抜け見上げ。植物が繁茂したようなデザインのテキスタイルが円筒状に下がり、自然光がにじみ出るように室内に入り込む。テキスタイルには植物の緑の色彩と熊楠の筆跡が転写されており、その元布をリボン状に切って編み込んだ。自然の中にこそ真理や思想が織り込まれていると言っているようでもあり、熊楠の手業の密度を体感させているようでもある

【写真:石田 篤】

LIXIL eye no.15

2018年2月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL

編集発行人 | 森田浩一郎

マーケティング本部

セールス&マーケティング統括部

〒100-6007

東京都千代田区霞が関3-2-5

霞が関ビルディング7階

Tel: 03-6273-3635

Fax: 03-6273-3742

制作 | 株式会社フリックスタジオ

デザイン | 株式会社ラボラトリーズ

印刷 | 竹田印刷株式会社

* 本記事の無断転載を禁じます

* 本文中の敬称は省略させていただきました

次号『LIXIL eye』no.16は、

2018年6月発行予定です。

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。

<http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

CONTENTS

特集

04 建築のまちを旅する | 03

田辺・白浜

06 テーマ1

博物学者・南方熊楠が暮らした 田辺・白浜で、ゆかりの建築を巡る

ナビゲーター | 赤松佳珠子

10 南方熊楠記念館新館 / 南方熊楠顕彰館

14 テーマ2

森の参詣道・熊野古道の文化的景観を体感する ——田辺から熊野本宮大社へ「中辺路」をたどる

ナビゲーター | 神吉紀世子

18 田辺・白浜建築めぐり

22 住宅クロスレビュー | 03

古材

鯨井 勇「プーライエ」× 岸本 耕「元代々木の家」

30 戦後建築コンペを振り返る | 03

平和記念公園 (コンペ実施年:1949)

軸線の可能性を引き出した「非凡」な案が1等に
文 | 豊川斎赫

36 新世代・事務所訪問 | 03

設計事務所 岡昇平

ナビゲーター | 門脇耕三

44 構造家の新発想 | 03

木造都市の復権

腰原幹雄

50 土木のランドスケープ | 03

苦田ダム

ナビゲーター・文 | 八馬 智

54 Design + Technique

渋谷キャスト

GINZA SIX

58 TOPICS

多様化する働き方とワーカーに応えるこれからのトイレ空間のあり方
文 | 石原雄太

61 INFORMATION

LIXILからのご案内 / 展覧会 + イベント / LIXIL出版 新刊案内

64 紙上の建築 | 03

インクと風か、紙とそら

海法 圭

田辺・白浜

特集 建築のまちを旅する 03

日本全国、どのまちを訪れても、そこにはすぐれた建築がある。

それにつわるエピソードを知れば、旅はさらに面白い。

和歌山県南部を紀南という。その紀南の中心都市、田辺市は隣町の白浜町とあわせて古くからの観光名所として知られる。

温暖で豊かな自然の残るこの地でエコロジーを唱えた博物学者がいた。南方熊楠である。

生誕150周年にあわせて開館した「南方熊楠記念館新館」をはじめ、熊楠の旧居を修復展示している「南方熊楠顕彰館」などゆかりの建築を巡ってみよう。

一方、ここは熊野古道の要衝。田辺を出発し、巡礼路の「中辺路」をたどりながら熊野本宮大社まで足を延ばす、山道をゆく。

番所山山頂の南方熊楠記念館(右)。番所山は江戸初期に、外国船監視のためにつくられた番所があったことからこの名がついた。2014年に番所山公園として整備される前は植物園だったことから、紀南特有の自然に加え、亜熱帯植物や熱帯植物などの外来植物も多く見られる。自然環境のフィールドミュージアムとして管理され、熊楠記念館はそのインフォメーションセンターとしての機能も果たす【写真：石田 篤】

テーマ1

博物学者・南方熊楠が暮らした 田辺・白浜で、ゆかりの建築を巡る

ナビゲーター | 赤松佳珠子 (CAT)



南方熊楠

みなかた・くまぐす

1867(慶応3)年、和歌山城下に、金物商を営む父・弥兵衛(のちに弥右衛門)、母・すみの次男として生まれる。父はのちに南方酒造(現・世界一統)を創業。略歴はp.09参照【所蔵：南方熊楠顕彰館(田辺市)】

01 | 番所山公園

江戸時代に遠見番所が置かれ、紀州藩の与力が交替で異国船の見張りにあたっていたことが地名の由来

02 | 粘菌

現在は変形菌と呼ばれる。アメーバのような変形体とキノコのような子実体の形態を合わせ持つ生物。変形体は移動しながら微生物などを摂食する動物的な性質で、子実体は繁殖のために胞子をつける植物的な性質



南方熊楠記念館新館

取材協力 | 矢田康順
取材・文 | 長井美咲
写真 | 石田 篤(特記以外)

万事において型破りだった南方熊楠。博物学者と紹介されることが多いが、その枠に収めるのを躊躇するほど、研究領域は多岐にわたる。それは熊楠が自らの好奇心に忠実に生きた結果でもあった。熊楠は生涯の半分を「口熊野」と呼ばれる和歌山県田辺市で過ごした。田辺市には「南方熊楠顕彰館」、隣の白浜町には「南方熊楠記念館」と、彼の思想に触れられる建築がある。「南方熊楠記念館」は2017年、熊楠の生誕150年を記念して新館がオープン。その設計を手がけたシーラカンズアンドアソシエイツ(CAT)の赤松佳珠子氏と田辺・白浜を巡った。

「南方熊楠記念館新館」は国立自然公園に属する「番所山公園⁰¹」の頂部で、周囲の樹木が近接するなかに立つ。「平場は既存本館と昭和天皇の御製碑の間、10m×40m程度と限られていたんです」と赤松氏。平場の外はすぐに樹木が生い茂る急な斜面が海岸線まで続く。「初めて敷地を見たときは、本当に建てられるのかと思いました」。

だからといって敷地を造成することは考えなかった。「この山の環境を壊したくなかったので、等高線の輪郭をそのまま立ち上げて壁とし、さらに樹木をできるだけ伐らなくて済むようにカーブさせました。そうしたら、全体が粘菌⁰²のように有機的な、くにかつとした形になったんです」。

南方熊楠が最も時間と労力を割いたのが粘菌の研究だ。環境を尊重したいという設計者の思いは、結果として、熊楠への敬意と重なった。

熊楠は、森羅万象——この世のすべては関連し合いながら存在するという自然観をもっていた。記念館新館は熊楠のこの自然観を体現している。1階は半分がピロティで、残る屋内空間も全面ガラス。外部の緑が自ずと内部に飛び込んできて、建物と自然の隔たりにない。対照的に2階は開口部がひとつもないが、緩やかな曲面壁が建物の輪郭をぼかす。また、真っ白なその壁には木々の枝葉が影絵のように映し出され、建物と自然が互いを引き立てながら寄り添う。

「周りを少し歩いてみましょうか」。赤松氏に促され、遊歩道を下った。番所山公園には南方系の珍しい植物がたくさん植えてある。海岸に出れば、磯

の潮だまりでさまざまな生き物や貝類も見られる。熊楠を魅了した紀南の自然を肌で感じた。

読書好きで並外れた筆写魔

和歌山は江戸時代に御三家のひとつ、紀州徳川家の城下町として栄えた。江戸後期には全国で8番目に人口の多い町だったという。

南方熊楠が和歌山城下の裕福な金物商の次男として生を受けたのは1867(慶応3)年。前号で紹介した建築家・建築史家の伊東忠太や文豪・夏目漱石、俳人・正岡子規などと同じ年だ。近代日本の傑人がこの年に多く輩出されていることは単なる偶然ではないだろう。1867年は大政奉還が行われた年であり、翌年は明治元年。日本は新しい時代を迎えようとしていた。

幼少期から熊楠はとくに自然界に対して好奇心旺盛、記憶力抜群、かつ読書が好きだった。わが国初の図入り百科事典『和漢三才図会⁰³』の必要な部分を数年がかりで筆写した逸話は有名だ。ほかにもさまざまな書物を読み、書き写す“筆写魔”で、このようにして東洋の知を体得したことが、のちの彼自身の基盤となっている。

父は熊楠の才能を伸ばすために、当時の商家には珍しく、新設された和歌山中学校に息子を入学させた。ここで博物学者の鳥山啓⁰⁴の薫陶を受けたことは熊楠が森羅万象に開眼する大きなきっかけとなった。しかし、学校の勉強は肌に合わなかったようで、授業にはあまり出ず、読書したり、山に

入って植物採集したりしていた。

東京大学予備門(現・東京大学教養学部)でも熊楠はやはり学校にはあまり通わず、もっぱら上野の図書館で和漢洋の書物を読みふけるか、フィールドワークに精を出した。アメリカで6,000点の菌類標本を採集した研究者の存在を知り、それを超える収集を志したのもこのころだが、学科の成績はふるわず、試験に落第。1886(明治19)年に帰郷し、その年の12月に父の許しを得て渡米した。

米英で自学13年

アメリカではカリフォルニア州サンフランシスコ、ミシガン州ランシングを経て、同州アナーバーに落ち着き、読書と植物採集の生活をしばらく続けた後、フロリダやキューバなどを放浪した。これら南部の地が藻類や菌類の宝庫であることを知ったからだ。キューバのハバナでは新種の地衣類を発見している。

1892(明治25)年、イギリスの首都ロンドンに移動し、大英博物館を拠点に本格的な研究活動を開始。読書と筆写に励み、帰国までの間に全52冊の「ロンドン抜書」を作成した。同館では東洋関係の資料整理にも協力するほか、科学雑誌『ネイチャー』に論文をたびたび投稿。1893(明治26)年の「東洋の星座」の初掲載を皮切りに、帰国までの間に同誌に発表した論文は30本にのぼる。熊楠はそれらの論文を通して、東洋にも固有の科学思想があったことを紹介しつづけた。ちなみに熊楠の論文は生涯に51本が『ネイチャー』誌に掲載されている。

南方熊楠顕彰会学術部長の田村義也氏は「熊楠は読書によって江戸時代の学者の知識や教養

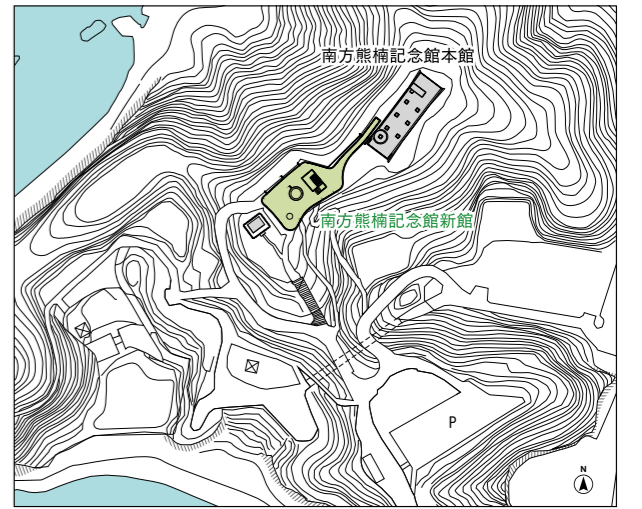
を受け継いでいます。

一方で英語やドイツ語の文献を読み、西洋の学問の伝統もそれなりに理解したうえで、東洋にも対等な知の体系がある、東洋は西洋に決して劣らない、という意識をはっきりもっていました」と語る。この考え方は同じく海外に学んだ忠太や漱石に通じるところが興味深い。また、熊楠には当時の西洋

の東洋人蔑視に対する反発もあったようだ。

ロンドン時代には人類学や民俗学、宗教学の勉強も始め、学問探究は充実していた。しかし、物価が高く、実家からの仕送りだけに頼る生活は困窮。アメリカからロンドンに移動した年に父が亡くなり、そのあと熊楠に仕送りを続けていたのは、1884(明治17)年に父が創業した南方酒造を継いだ弟の常楠だ。常楠は兄の学業成就を願いながらも、米価の高騰や株価の大暴落といった事態に遭い、金策に苦慮し、送金が滞りがちになった。

そのことに苛立ちを募らせた熊楠は、人種差別も背景に大英博物館でトラブルを起こし、同館を去らざるを得なくなった。それでも他の博物館で自学を続けたが、ついには経済的に行き詰まり、大量の書物や植物標本とともに帰国の途についた。1900(明治33)年、熊楠は33歳になっていた。



配置図 S=1:2,500



南方熊楠記念館の谷脇幹雄館長(左)と赤松氏

03 | 和漢三才図会

江戸時代中期に大坂の医師・寺島良安が編纂した図入りの百科事典。全105巻。中国の類書「三才図会」を範とした

04 | 鳥山啓

紀伊田辺藩生まれの博物学者、教育者(1837-1914)。軍歌「軍艦行進曲」の作詞者としても知られる。熊楠は後年、鳥山を生徒唯一の師と語った



新館の奥に立つ記念館本館は、野生司義章氏が設計、1964年に竣工。趣きあるモダンな建物で、エントランスの螺旋階段が美しい。新館とは2階のブリッジで接続する。CATにとってはこの本館も、「既存環境のひとつ」だった



1



2



3

1 熊楠が亡くなるまでの25年間を過ごした「南方熊楠邸」(旧南方家住宅)。保存にあたり、熊楠が暮らしていた昭和初期の姿に戻す形で修復され、2015年に国の登録有形文化財となった。新属新種の粘菌「ミナカテルラ・ロンギフィラ」を発見するなど熊楠の研究園だった庭は、当時の雰囲気や彷彿とさせるように再現。母屋と書斎の間にそびえる大きな楠の木は、熊楠が特別な愛着を抱き、訪れる人に自慢していたという。熊楠の研究活動は国際的かつ学際的、民俗学の分野で生前交流のあった柳田國男は「日本

人の可能性の極限」と評した。柳田は民俗学者であると同時に高級官僚でもあったが、熊楠の神社合祀反対運動を支援した
2 南方邸の書斎。この住まいに移る際、前の借家から移築した
3 顕彰館には高さの異なる切妻屋根が連続して架かる。住宅地に立つことから、道路側を低く抑えた。また、道路との境界には白い漆喰の土塀を設け、周囲の景色に馴染ませた【写真提供：インテグレート デザイン アソシエイツ】

紀南田辺に落ち着く

帰国後、熊楠は紀伊半島の南端に近い那智山麓で暮らした。いわゆる聖地「熊野」の一画である。失意のうちに帰国し、故郷には自分の居場所がなく、いわば隠遁生活のようなものだったが、結果的に那智での3年間は充実していた。さまざまな生命の世界が存在し、それらの採集に明け暮れる日々は熊楠にとって幸せだった。世界は無数の因果関係で成り立っているという自身の宇宙的思想(のちに「南方マンガラ」と呼ばれるようになる)を模索したのもこのころで、熊楠の自然観の根幹は熊野で育まれた。さらに、原生林の残る山中での生活は、エコロジーという言葉で生態系の全体像を捉えようとする後年の思想につながっていく。

1904(明治37)年、熊野の植物調査を完了した熊楠は、中学時代からの親友を訪ねて紀伊半島南西部の田辺にたどり着いた。そして親友たちと交わるうちにこの地が気に入り、定住することにした。

田辺は紀南の中心都市だ。紀伊半島は本州から黒潮に向かって突き出た陸地で、その南部にあたる紀南の海沿いは温帯と亜熱帯が混じり合う。また、海岸と山が非常に近く、山は高いところで1,000mを超えるから、狭い地域に高度差がある。そのため自然の多様な生態系が存在する。海岸付

近の低地では沖縄でしか見られないような生物が棲息する一方、山で最も標高の高い付近にはブナ林が広がる。つまり日本列島をぎゅっと圧縮したような場所が紀南で、「その面白さは熊楠を引き付けた要因として大きいでしょう。生物学者の興味をそそる土地なんです」と田村氏は話す。

神社合祀反対運動から環境保護活動へ

熊楠は1906(明治39)年、39歳のときに鬮雞神社(p.18参照)の宮司の四女・松枝と結婚。翌年には長男・熊弥、1911(明治44)年には長女・文枝が生まれた。また、弟の出資により1916(大正5)年に購入した家は終の住処となった。「南方熊楠顕彰館」はこの家の保存を含めて計画された。

ようやく得た安らぎは、しかし、1906(明治39)年から政府が進めていた神社合祀政策によって阻まれた。一町村一社を基準に、小さな集落ごとにあった小さな神社が次々に合祀廃社されていく。その狙いは周辺の森林の材木を払い下げて財源とすることで、整理統合された多くの神社跡で森林が伐採された。

熊楠はこれらの森林に棲息する生物や、神社を単位とする共同体の風習や伝承を研究対象として

いた。森林が育んできた数千万年の生物が合祀によって一朝にして消滅する。熊楠は怒りを爆発させ、反対運動にのめり込んだ。

熊楠の反対運動は次第に世論を動かしたが、1920(大正9)年に神社合祀が終息するまでかなりの自然環境が破壊された。そのため熊楠は神島(p.18参照)や継桜王子の一方杉(p.21参照)、引作神社の楠など、かろうじて守ることのできたものを先々も保護していく活動に晩年まで力を注ぐようになる。熊楠が今日、エコロジーの先駆者といわれる所以だ。とくに神島は田辺を代表する地として重視し、島全体の生態系を保護すべきだと働きかけ、1930(昭和5)年に県の、1935(昭和10)年には国の天然記念物に指定された。

1929(昭和4)年、昭和天皇の紀南行幸の際に熊楠はこの神島で拝謁し、お召艦長門で粘菌についてご進講した。生物学者だった昭和天皇は皇太子時代から粘菌に関心をもち、熊楠を世界的な粘菌学者として、かねてより知っていたという。

南方熊楠記念館前に立つ歌碑には、「雨にけふる神島を見て紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ」という昭和天皇の御製が刻まれている。熊楠の没後、1962(昭和37)年の行幸の折に詠まれたものだ。谷脇幹雄館長は「天皇が無位無官の一研究者の名前をフルネームで歌に詠み込まれるなんて普通は考えられません。それだけ熊楠との交流が思い出深かったということでしょう」と語る。

偉業を伝える記念館と顕彰館

熊楠は1941(昭和16)年に満74歳でこの世を去った。夢だった「南方植物研究所」の設立は叶わなかったが、長女文枝の夫で水産経済学者の岡本清造の尽力と和歌山県の支援により、1965(昭和

40)年に南方熊楠記念館が白浜町に開館。また、熊楠の書類や標本などの資料を管理していた文枝が2000(平成12)年に亡くなると、家屋を含む遺産すべてが田辺市に寄贈され、その遺産を保存し、熊楠の偉業を研究・発信する施設として「南方熊楠顕彰館」が2006(平成18)年に南方邸旧居の隣に開館した。

顕彰館にもまた建築家の熊楠への向き合い方が現れている。それは熊野の山と森——熊楠の思想と精神の源であり、活動の場——を体現することだ。館内に入り眼前に広がるのは、スギ丸太の林立と、太い貫格子から注ぐ木漏れ日。見上げると奥ほど天井は高く、そちらへ延びた階段を上ればその身も上昇してゆく。熊野の森の存在へイメージが連なってゆく内観だ。もうひとつの熊楠への姿勢は、その思想と日常の実物へ向けられた。東西のメイン動線と直交して、北側には文筆と標本のコレクションが奥深くまで所蔵され、逆の南側の視線の先には熊楠が最後に暮らしていた住まいの実物が当時の場所のままにある。その中間に、熊楠に接する入口としての展示スペースが配置されている。また、ここはかつての武家城下町の真っ只中。通り側の高さを低く抑えた屋根形は、まちなみに馴染む佇まいだ。

白浜町の記念館新館は囚らずもCAIパートナー小嶋一浩氏の遺作のひとつとなった。生前最後に訪れた現場がこのプロジェクトだった。小嶋氏はプロポーザルのプレゼンテーションのときに「熊楠の記念館だからこそ設計したい」と熱く語ったという。赤松氏は「熊楠は、心と物の接するところに起こる現象が大切だと言っていて、私たちの設計思想とのシンパシーを感じました」と話す。「熊楠が建築もやっていたら、どんなものをつくったのでしょうか」。黄泉の国で2人は記念館新館について語り合っているかもしれない。



神島(かしま)全景。ハカマズラなど貴重な生物が生育していることから、島そのものが天然記念物に指定されている。神社合祀により御神体のなくなった島として樹木が一部伐採されたが、熊楠の保護運動により中止。同じく熊楠らの申請により、1935年に国の天然記念物に指定された。上陸には田辺市の許可が必要



記念館新館の屋上。右の円筒は1階吹き抜けの延長で、夜には「ランタン」のように発光し、まちのランドマークとなる

赤松佳珠子 あかまつ・かずこ
1968年東京都生まれ。1990年、日本女子大学家政学部住居学科卒業後、シーラカンスに参加。2002年よりシーラカンスアンドアソシエイツ(現CAI)のパートナー。2013年、法政大学准教授に就任。2016年より同大学教授。

矢田康順 やだ・やすより
1954年三重県生まれ。1977年、武蔵工業大学工学部建築学科卒業。1979年、AAスクール ディプロマコース修了後、リチャード・ロジャース アンド パートナーズ、磯崎新アトリエを経て、2000年にインテグレートデザイン アソシエイツ設立。

長井美暁 ながい・みあき
編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学卒業後、「室内」編集部に所属。2006年よりフリーランス。

南方熊楠 略歴			
1867(慶応3)年 和歌山城下にて、金物商を営む父・弥兵衛(のちに弥右衛門)、母・すみの次男として生まれる	1888(明治21)年 11月ミシガン州立農学校を退学、アナーバーに移り、本格的に植物採集を開始	1901(明治34)年 那智で暮らし始め、熊野の生物調査と採集を行う	1916(大正5)年 田辺市中屋敷町に新居を得て、以後終生住む
1879(明治12)年 和歌山中学校(現・和歌山県立桐蔭高校)に入学	1891(明治24)年 フロリダ州に移る。さらにキューバに渡り、新種の地衣類を発見	1904(明治37)年 那智より田辺に移住	1926(大正15/昭和元)年 単行本『南方閑話』『南方随筆』『続南方随筆』を刊行
1884(明治17)年 大学予備門(現・東京大学教養学部)に入学。父が南方酒造(のちの世界一統)を創業	1892(明治25)年 9月渡英、ロンドンに到着	1906(明治39)年 田辺の鬮雞神社宮司田村宗造の四女松枝と結婚	1929(昭和4)年 昭和天皇の紀南行幸の際、田辺湾神島で拝謁。お召艦長門でご進講。粘菌標本110種を進献
1886(明治19)年 大学予備門を中退し、和歌山へ帰郷。同年12月に渡米	1893(明治26)年 科学雑誌『ネイチャー』に論文が初掲載	1907(明治40)年 全61冊となる「田辺拔書」を始める。	1935(昭和10)年 神島が国の天然記念物に指定される
1887(明治20)年 1月サンフランシスコ着。パンフィック・ビジネス・カレッジに入学。同年8月ミシガン州ランシングに移り、州立農学校に入学	1895(明治28)年 大英博物館の図書閲覧を許され、蔵書の筆写を開始	1909(明治42)年 神社合祀反対運動を始める	1941(昭和16)年 12月逝去。満74歳。田辺市稲成町の高山寺に眠る
	1900(明治33)年 ロンドンより帰国	1911(明治44)年 柳田國男より来信、以後文通を重ねる。長女文枝誕生	

南方熊楠記念館新館

2016年(開館 2017年)

設計 | 小嶋一浩+赤松佳珠子 (CAI)

熊楠の自然観を体現する建築

平面外形は粘菌のように有機的な曲線を描く。この形は敷地内の樹木をできるだけ伐らず、要求された展示面積を満たすために等高線の輪郭をそのまま立ち上げるように配置したこと、また、新館建設後に耐震改修工事が予定されていた本館までの車両動線を確保する必要があったことなどから導き出された。敷地内の大木を避けるように立つ姿は、熊楠の自然観を体現している。1階の半分はピロティ、もう半分を占めるエントランスホールは全面ガラス張りで、周囲の緑が建物内に浸食するかのよう開放的だ。打って変わって2階の展示室は閉鎖的で、熊楠の世界に没頭できる。この構成を実現するために、半アーチ壁とピン柱の構造を採用し、上下階の剛性の不均等を緩和した。周囲の緑や人の動きが見え隠れするように、あえて壁をアーチではなく半アーチにしたという。屋上の展望デッキでは360度の景色を楽しめ、神島まで望める。そしてこの屋上から1階までシリンダー状の吹き抜けが貫通し、緑に覆われる1階に天上からの明るい光を届けている。

- 1 1階のピロティ。既存の樹木を避けるように壁面がカーブしている
- 2 新館から本館を見る。敷地の外はすぐに急な斜面。施工の際はそのギリギリのところに足場を組んだ。赤松氏が「ラフタークレーンや工事車両が巡回できる空き地を確保することも、形を決める際の大きな要因でした」と話すように、設計時に施工計画も同時に考える必要があった
- 3 外から見ると白いコンクリートの塊が宙に浮かぶよう。外壁には全艶の光触媒塗装を施している
- 4 1階エントランスホール。ガラス越しに周囲の緑と連続し、それが天井にも映り込む。番所山公園は全体がフィールドミュージアムという位置づけで、ここはその拠点でもある。中央の吹き抜けには植物が繁茂したようなテキスタイルが下がり、自然光がそこからにじみ出るように室内に入ってくる
- 5 1階吹き抜けに吊り下がっているテキスタイルの元布。植物の緑と、熊楠の筆跡が転写されている。テキスタイルは安東陽子氏のデザイン
- 6 新館と本館を2階レベルでつなぐ渡り廊下。展望窓を設け、屋上とは異なる眺望を楽しめるようにしている。この連窓は赤松氏と小嶋氏との間でかなり議論したという。「小嶋は自分の体験から、トンネルを抜けると空間が一変するようづくりが好きで、ここブリッジも開口部は一切とらず、黒のほうがいいと言っていました。けれども私は、木の上に出る高さだから、とにかく外の眺めを見せたいと思った。結果的に小嶋が折れました」と赤松氏は振り返る
- 7 2階の展示室は開口部がなく、黒色の仕上げで1階とは対照的



1



2



3



4



5



6



7

南方熊楠顕彰館

2005年(開館 2006年)

設計 | 矢田康順(インテグレートデザイン アソシエイツ) + 堀 正人(ホリアーキテクト)

熊楠の思想にヒントを得た 「貫壁」構造

熊楠の遺産である文筆、標本などの資料と邸宅を保存・研究し、それを社会に発信すべく展示する施設。2003年に公開設計コンペで矢田康順氏と堀正人氏の共同案が選ばれた。熊楠邸は移築することなく元の位置のままに、その北側隣地を獲得して合わせた敷地に、収蔵・研究・展示棟が設けられた。熊野の森のイメージを表象する、スギ丸太と貫格子壁が印象的だ。特に展示棟に用いられている貫格子壁は、森の木漏れ日を彷彿とさせ、隣の熊楠邸への視線を確保する透過性を生んでいる。矢田氏は「今回は日本の伝統技術に着目しようと思いました。我国には貫工法があります。古くは塗壁の中に埋め込むことで柱や梁のサイズを小さくする伝統技術です。土塀の残る田辺市内で、壁が剥がれてむき出しになった貫を発見してそのことを思い出しました」。合欠きで組む一般的な面格子だと、木痩せによるガタがきて構造体にはならない。しかし貫格子壁にすると木痩せしても^{くまび}楔で追い締めできて、耐震壁として機能する。

保存のためには、収蔵庫は閉じるに越したことはない。しかし修復や研究に対する理解を広めるには、それを開く利点もある。ここでは思い切って収蔵庫に窓が設けられた。展示スペースから資料や標本の並ぶ庫内や、修復作業の様子を覗くことができる。



1



2



3



5



4

- 1 南方熊楠邸の母屋。左に自身が植栽している庭、正面奥に見えているのが書籍や標本が保存されていた蔵。風呂やトイレなど新設されたものは撤去し、トタンの外壁を板壁に戻し、母屋と書斎、土蔵、井戸上屋の4棟を熊楠の生前、昭和初期の姿に修復保存した。熊楠邸は顕彰館で最大の展示物
- 2 1階展示スペース。正面に収蔵庫。収蔵庫には熊楠の蔵書や資料約25,000点を保存している。来館者は左手の丸窓から収蔵庫内を覗くことができる [写真提供: インテグレートデザイン アソシエイツ]
- 3 1階展示スペース。高さの異なる妻切屋根の連なりに木漏れ日のような光で森の大気を呼び起こしている [写真提供: インテグレートデザイン アソシエイツ]
- 4 展示スペース(右)と2階の交流閲覧室(左)
- 5 展示スペース。三方を囲む貫格子壁は、丸太柱間の壁を約300mmピッチの間柱と貫を格子状に組んで露にした耐震壁。面格子と違って木痩せによるガタを楔で追い締めできる。壁の変形能力は構造用合板の2倍、相関変形角は1/15以上の耐震性能をもつ
- 6 顕彰館入口。外壁は貫格子壁が透けて見える水平を強調したガラスカーテンウォールと、屋根と壁が一体となったような墨色の金属板平葺きに覆われている



6

テーマ2

森の参詣道・熊野古道の 文化的景観を体感する

——田辺から熊野本宮大社へ「中辺路」をたどる

ナビゲーター | 神吉紀世子(京都大学教授)

取材・文 | 磯 達雄
写真 | 小松正樹

- 1 熊野古道の石敷きがいつの時代に築かれたものなのか、記録からははっきりとはしていないが、現在見られるものは多くが江戸時代の工事と推定されている。中辺路、伏拝王子の近くで撮影
- 2 熊野古道全体地図
熊野古道は紀伊半島に散在する霊場をつなぐ参詣の道として発展した。大きく3つのルートからなる。京都・大阪から紀伊国へと進む紀伊路、伊勢神宮から新宮の熊野速玉大社を経て熊野本宮大社に至る伊勢路、そして吉野と熊野本宮大社の間を結ぶ大峯道である。紀伊路はさらに、田辺から山中を行く中辺路、海沿いを熊野那智大社へと行く大辺路、高野山から熊野本宮大社へと行く小辺路に分かれる



1

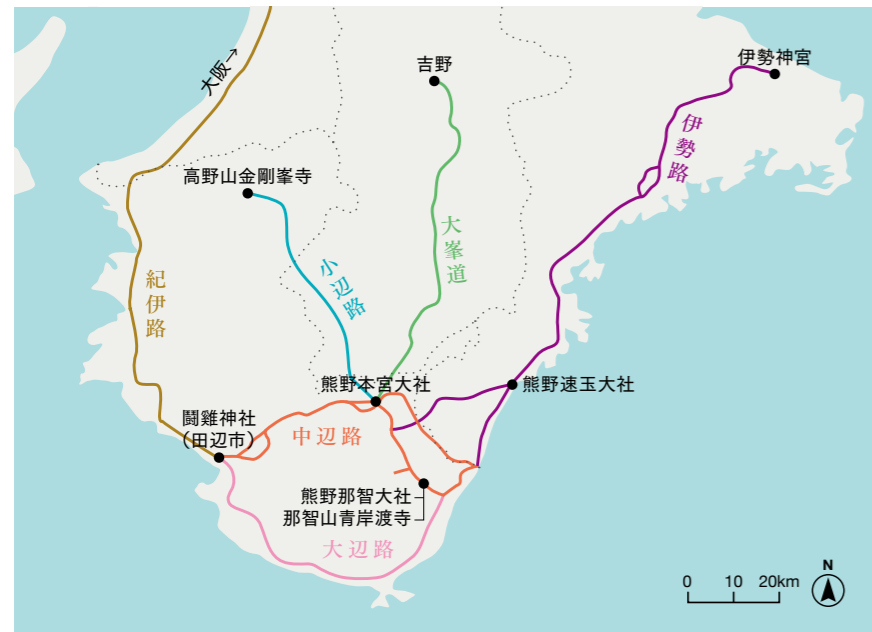
南方熊楠が愛した熊野には、平安時代から栄えた参詣の道があった。奥深い山を巡る古道は現代に受けつがれ、世界遺産にも登録されて、世界中から多くの来訪者を引き付けている。熊野古道の魅力は何か。それをとらえるには、文化的景観の登録説明にとどまらない幅広い理解が欠かせない、と京都大学の神吉紀世子教授は語る。

田辺市の熊野本宮大社、新宮市の熊野速玉大社、那智勝浦町の熊野那智大社。これらを総称して熊野三山と呼ぶ。熊野古道は熊野三山に参詣する道である。

1本の道を指すのではなく、大きく分けて紀伊路、伊勢路、大峯道の3つがある。紀伊路は京都から摂津を経て、紀伊国へと進むルート。伊勢路は伊勢神宮から新宮を経て熊野本宮へと向かうルートであり、大峯道は吉野と熊野本宮の間を山伏が歩いた山岳ルートである。紀伊路はさらに3つのルートに分かれる。田辺からは山中を通る中辺路と、海沿いに那智へと回る大辺路と、高野山と熊野本宮を結ぶ小辺路である。

これらのうち、早くから参詣者が行き交ったメインルートが中辺路だ。すでに平安時代には皇族や貴族がこぞって詣でようになっており、1201(建仁元年)に行われた後鳥羽上皇の熊野詣の様子は、同行した歌人の藤原定家によって『後鳥羽院熊野御幸記』に記録されている。室町時代には庶民も参詣するようになり、参詣者が列をなして歩く様子は、「蟻の熊野詣」とも言い表された。

江戸時代までは人気をたもった熊野詣だが、明治に入ると神社合祀の政策により熊野神の御子神を祀った王子の社は次々と廃止されていき、参詣者も激減した。しかし近年は再び、たくさんの人が熊野古道を歩くようになっていく。きっかけのひとつは2004(平成16)年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が



2



1



2



3



4

- 1 近露王子。明治期の合祀で社は失われ、碑が立つのみ。碑の文字は大本教の教祖、出口王仁三郎によるもの
- 2 滝尻王子。後鳥羽上皇が参詣した際、ここで歌会が催されたという
- 3 ちかの平安の郷かめや。画家、野長瀬晩花の生家を改修した古民家カフェ
- 4 継桜王子の近くにあるとがの木茶屋。かつては茶屋だったが、現在は休憩所として運営されている



継桜王子には樹齢800年にもなる巨木が立ち並ぶ。熊野那智大社に向かってE方向に枝を伸ばしていることから「野中の一方向」と呼ばれる



1



2

ユネスコの世界遺産に登録されたことだ。熊野古道の主要部が、登録対象に含められ、その重要性が国際的に認められたのである。道が世界遺産に登録されたのは、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路について2件目となる快挙だった。

世界遺産の登録基準「文化的景観」とは

世界遺産には文化遺産、自然遺産、複合遺産の3分類があり、熊野古道は文化遺産のうちの「文化的景観」として評価を受けて登録された。文化的景観とは、1992(平成4)年から採り入れられた登録基準で、自然と人間の相互の営みによってつくり上げられた景観を指すものである。熊野古道には、崇高なる山や森の自然と、そこに靈性を感じて信仰の場としてきた人間の歴史の両方がある。その組み合わせにかけがえない価値があると、評価を受けたのである。

中辺路は田辺を出てしばらくは平地を進むが、滝尻王子からは急に険しい道となる。そこから熊野本宮大社までは、途中で1泊し、2日をかけて歩くほどの距離だ。うっそうとした林の中を抜けると、青い山並みが遠くに望める。かつて後鳥羽上皇や藤原定家が味わった眺めが、時代を超えて目の前に広がっていると想像すれば、脚の疲れも吹き飛んでしまう。

また、急な斜面地でところどころに現れる石敷きの道は、いかにも古道らしい風情を感じさせる。道沿いに「王子」が数多く設けられているのも中辺路の特徴だ。信仰の場所として設けられたものだが、長い道のりの途中で、立ち寄る楽しみを与えてくれる場所にもなっている。

地元の生活と一体となった道の魅力

ところで熊野古道の中辺路は、すべての道程が世

界遺産というわけではなく、登録外となっている箇所も少なくない。

たとえば、山間の盆地に位置する近露王子の周辺である。このあたりはかつて参詣者の宿場として栄えた町で、道の両脇には民家や商店が並び、路面はアスファルトで舗装されている。現代の、普通に見られる農山村である。こうした箇所の景観は、熊野古道を歩く人にとって目をそむけるべきものだろうか。そうではない、と京都大学の神吉教授は言う。

「世界遺産では特別に説明された貴重な景観に目が行き、そこだけが保存されがちだが、地元の人々が日々耕している田畑や林業を営む林など、日常と一体化した風景も同じように大事。そこで人々が暮らしていたからこそ、古道は長きにわたり守られてきたのだし、道と生活は一体のもの」。

神吉教授は熊野古道の世界遺産登録に際して和歌山県の調査委員会メンバーも務めた。そのかわりで、熊野古道の周辺住民にも多く話を聞いた。

「南方熊楠が調査に来たときに泊まったのがこの小屋、などと地元の人しか知らない情報をいろいろ教えていただいた。近世までの参詣を主テーマとする遺産解説では扱われない、現代に生きるローカルな名所の評価も、文化的景観をとらえるうえで非常に重要な要素だと実感させられた」。

近露の集落には、著名な画家である野長瀬晩花の生家もあった。野長瀬家は熊楠と交流が深く、近年、合祀前の近露王子神社宮殿がこの生家から発見され市文化財となった。傷んでいた建物を修復し、現在はカフェとしても営業している。地元有志によって本格的な生花が展示されたこともあるという。

中世から現代へと続く文化の営みを重層的に眺めること。そこに熊野古道が備える文化的景観の面白さがある、と神吉教授は強調した。

- 1 熊野本宮大社。林間の石段を上った先にある社殿は、重要文化財に指定されている
- 2 大斎原(おおゆのはら)を伏拝王子から望む。川の合流地点にある中洲で、かつてはここに熊野本宮大社があった。1889年の水害で社殿が流れ、現在の地に移転している

神吉紀世子 かんき・きよこ
1966年大阪府生まれ。1989年京都大学工学部建築学第二学科卒業。1991年同大学大学院修士課程修了。同大学助手を務めたのち、1997年同大学博士(工学)取得。和歌山大学助教授、京都大学准教授を経て、2011年より京都大学大学院工学研究科建築学専攻教授。

磯 達雄 いそ・たつお
建築ジャーナリスト/1963年埼玉県生まれ。1988年、名古屋大学工学部建築学科卒業。1988-1999年、日経アーキテクチャ編集部に勤務。2002年よりフリックススタジオ共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

田辺・白浜建築めぐり

TANABE / SHIRAHAMA

田辺市は古くから海上交通そして熊野詣の拠点として栄えてきた、和歌山県第2の都市。建築家の代表的な公共建築が点在する。隣の白浜町は道後、有馬にならぶ古湯のひとつで、熱海、別府とともに日本三大温泉と呼ばれる一大観光地だ。熱海同様、戦後は新婚旅行先や団体客向けの歓楽街として発展。90年代にはホテル川久をはじめ、リゾートホテルが建ち並び、パンダのいるアドベンチャーワールドも有名になった。

この地の歴史的人物が南方熊楠だ。2つのミュージアムが情報拠点となっており、どちらも現代建築の秀作だ。田辺を始点として熊野古道のひとつである中辺路が、熊野本宮大社まで続いている。平安時代の上皇も詣でた由緒ある参詣道で、随所に石敷きの舗装や水路が整備され、熊野詣に注がれたエネルギーを感じる。中辺路と並行して国道が通っており、道中の名所旧跡、古民家宿、カフェなどもみどころだ。なかへち美術館も途中にある。熊野本宮大社は旧来熊野川の中洲にあった。そこは山奥にあって畏怖を感じるほどの広い川幅で、何度も水害で流されては再建されてきた。しかし明治になって付近の高台へ移転し、宮は1/3ほどの数に縮小している。



01

秋津野ガルテン
改修設計 | 本多友常
竣工 | 1953年
改修 | 2008年
田辺市上秋津4558-8
取り壊し予定だった小学校校舎を地域内外の住民が出資し改修。都市と農村地域の交流を目的とした体験型グリーンツーリズム施設としてオープンした。木造校舎は耐震補強を加え、展示室および交流体験施設として活用。中庭を囲むように、宿泊棟、農家レストランが新設された




03



南方熊楠顕彰館 (南方熊楠邸)
顕彰館設計 | 矢田康順 (インテグレーション デザイン アソシエイツ) + 堀正人 (ホリ アーキテクト)
顕彰館竣工 | 2005年
田辺市中屋敷町36

06

神島
田辺市新庄町3972
田辺湾に浮かぶ、「大山 (おやま)」と「小山 (こやま)」の2島からなる小島。全島が照葉樹林に覆われ、生物学上、貴重とされる植物や粘菌類が多く生育していたことから天然記念物に指定されている。熊楠が、保存運動に全力を傾けたことでも知られる (上陸には許可が必要)




04

関雞神社
創建 | 419年
田辺市東陽1-1
名前は、源平合戦の際に、弁慶の父と伝えられる熊野別当湛増が紅白の鶏を間合せた故事に由来。熊野三山の別宮的存在として、また大辺路、中辺路に分岐する要衝として熊野信仰の一翼を担っている。境内には、樹齢約1,200年の大楠がそびえる。社殿は重要文化財。2016年10月に、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録された

05

田辺市文化交流センター たなべる
設計 | アール・アイ・エー 竣工 | 2011年
田辺市東陽31-1
病院跡地に計画された、図書館、歴史民俗資料館および市民広場からなる複合文化施設。外観は、この地域の昔からのまちなみで見られる土塀や漆喰、瓦屋根をイメージさせるデザイン。内部には紀州杉がふんだんに使われ、閲覧室は乳白ガラスで囲い直射光を抑えつつ、庇の反射を利用して柔らかな光を取り込む工夫がなされている

02

高山寺および南方熊楠墓
創建 | 不詳
田辺市稲成町392
田辺の市街地を一望できる高台に位置する古刹。古記にいわく聖徳太子草創、弘法大師中興とある。多宝塔は文化13年の建立。熊楠は生前によく訪れ、境内の一角にあった猿神社から数多くの植物を採集した。この猿神社の合祀と神木の伐採が、熊楠の神社合祀反対運動のきっかけとなった。海を望む墓地には熊楠の墓があり、墓からは旧居、さらに神島までが一直線上に見える




07

田辺市立美術館
設計 | 坂倉建築研究所大阪事務所
竣工 | 1995年
田辺市たきない町24-43



新庄総合公園の一面に建てられた美術館。江戸中後期に活躍した文人画家や近代の画家たちの作品を主に収蔵・展示する。周囲の景観と調和するよう建物のボリュームを抑えた分棟形式を採用し、屋根とトップライトがユニークなシルエットを生み出している

08

とれとれヴィレッジ
第1期設計 | 藤井設計事務所
第2期・第3期設計 | アーキ・アーバン建築研究所
竣工 | 2009年(第1期)、2012年(第2期)、2013年(第3期)
西牟婁郡白浜町堅田2498-1
発泡ポリスチレンを構造体としたドーム型建造物の宿泊施設。現在、133棟が並ぶ。運営には、地元漁業協同組合があたっており、付近には同組合が運営するレジャー施設、レストラン、温浴施設、販売所が集積している



10

南方熊楠記念館新館
設計 | 小嶋一浩 + 赤松佳珠子(CAT)
竣工 | 2016年
西牟婁郡白浜町3601-1

11

南方熊楠記念館本館
設計 | 野生司義章
竣工 | 1964年
西牟婁郡白浜町3601-1
熊楠の遺族から資料の寄贈を受けて、その偉大な業績と遺徳を後世に伝えることを目的として1964年に竣工。新館完成後も展示室の一部として使われている。設計者の野生司義章は大宮サッカー場(1964)などの設計を手がけ、のちに千葉工業大学で教鞭も執った

09

ホテル川久
設計 | 永田・北野建築研究所
竣工 | 1991年
西牟婁郡白浜町3745

三方を海に囲まれたホテル。「別天地」をテーマに、イギリス製の煉瓦、ローマンモザイク、金箔張りのドーム天井、中国北京の紫禁城と同じ瑠璃瓦と、世界各地から材料と職人を集めつくり上げられた。ロビーの24本の柱は、現在ではほとんど使われていないヨーロッパの古典技術を日本の左官職人・久住章氏が再現したもの。第6回村野藤吾賞(1993)受賞



12

円月島
西牟婁郡白浜町3740
正式名称は「高嶋」。南北130m、東西35m、高さ25mの小島で、北側の番所の崎から続く比較的新しい磯岩でできており、島の中央部に丸い穴(海食洞門)が開いていることから「円月島」と呼ばれる



13

千畳敷
西牟婁郡白浜町2927-72
波の浸食でできた平らな海底(波食台)が隆起して海岸段丘となった場所。スロープ状の白く柔らかい岩は、第3紀層の砂岩からなる大岩盤で、荒波に浸食され壮大な景観をつくり出している



14

三段壁
西牟婁郡白浜町2927-52
長さ2km、高さ60mにおよぶ柱状節理(岩体に入った規則正しい柱状の割れ目)の大岩壁。岩壁の下部には海食洞(波の浸食によってできた洞窟)が形成され、熊野水軍の隠し洞窟だったと伝えられる三段壁洞窟がある



15

田辺市立スポーツ施設 林業者等健康増進センター
設計 | 渡辺豊和建築工房
竣工 | 1987年
田辺市龍神村安井822
鉄筋コンクリート造の壁の上に木造で屋根を架けている。その後、広まった大規模木造建築の先駆けといえる作品。両側面には木造トラスのバットレスが飛び出している。1987年 日本建築学会賞(作品)受賞



16

熊野古道館
設計 | 岡本設計 竣工 | 1995年
田辺市中辺路町栗栖川1222-1
滝尻王子の向かいに位置する、熊野古道を中心とした中辺路の観光案内と熊野古道紹介を兼ねた休憩施設。中辺路町内の12の王子社にちなみ、建物は十二角形をなしている



17

滝尻王子
田辺市中辺路町栗栖川859
熊野三山の霊域の入口に鎮座する王子で熊野九十九王子社のなかでも社格の高い五峰王子に数えられる。ここから近露王子まで急坂が続く。途中には藤原秀衡ゆかりの「乳岩」などが残る。写真は、王子裏手の岩を抱いた巨木



19

近露王子
田辺市中辺路町近露字北野906-1
五峰王子に次いで格式の高い准五峰王子のひとつに挙げられる王子。周辺は、熊野への中継地として宿場が栄え、今もその名残がある

18

田辺市立美術館分館 熊野古道なかへち美術館
設計 | 妹島和世 + 西沢立衛 / SANAA 竣工 | 1997年
田辺市中辺路町近露891
野長瀬晩花や渡瀬凌雲など、地元ゆかりの作家の作品を展示するほか、現代の表現も紹介している。閉じた展示室とその四周を囲むガラス張りの回廊、そしてそのさらに外側に、事務室、保管庫、機械室、トイレがそれぞれの機能に応じた形と大きさで突き出すという平面構成をとっている



20

お宿 月の家
設計 | 不詳
竣工 | 江戸末期
田辺市中辺路町近露905-1
中辺路最大の宿場町として栄えた近露で、150年続く老舗旅館。江戸末期に建てられた建物をそのまま使用している



21

ちかの平安の郷かめや
設計 | 不詳
田辺市中辺路町近露1129
日本画家・野長瀬晩花(1889-1964)の築100年を超える木造平屋の生家を、観光案内、飲食・体験施設として整備し、2013年にオープン。晩花の父はここで宿屋を営んでおり、屋号の「かめや」を現在も通称として使っている

23

とがの木茶屋
設計 | 不詳
竣工 | 1970年代後半
田辺市中辺路町野中393
かやぶき屋根が目を引き熊野古道沿いの休憩所兼情報ステーション。老朽化などにより2007年から閉鎖した状態となっていた建物を市が借り受け、景観保全を兼ねて整備し、2016年にオープン。住民団体が管理運営にあたっている

22

つぎぎくらおらじ 継桜王子・野中の一方杉
田辺市中辺路町野中590-1
樹齢800年以上、直径が2~3mを超える杉の巨木が境内にそびえる王子。古くから信仰の対象となってきたが、明治末期に神社合祀により社殿は廃絶。現在残る巨木は、熊楠の保存運動によって伐採を免れた歴史をもつ



24

おおのほら 大斎原
田辺市本宮町本宮1
熊野川・音無川・岩田川の合流点にある中洲にあった熊野本宮大社旧社地。江戸時代まで中洲への橋はなく、川の流れて身を清めてから詣でるのがしきたりだった。1889年の洪水で社殿の多くが流され、現在は、流出した中四社・下四社を祀る石祠と大鳥居が建てられている



27

世界遺産 熊野本宮館
設計 | 香山・阪根建築設計業務共同企業体
竣工 | 2009年
田辺市本宮町本宮100-1
自然と伝統、木材をコンセプトに建設された観光情報や地域情報を発信する拠点施設。建物は、大社から熊野川へ抜ける軸線に沿って分棟配置されている。使用している無垢の杉材はすべて地元産で、多目的ホール上部から自然光を取り入れ、木造の小屋組と格子を美しく照らす工夫がされている



25

熊野本宮大社 瑞鳳殿
設計 | 矢田康順(インテグレートイデオデザイン アソシエイツ)
竣工 | 2014年
田辺市本宮町本宮195-3
神社の研修施設で、本殿に向かう参道に面した1階には、カフェや土産品店舗も入っている。建て替え前の施設が水害で大きな被害を受けたことを踏まえて、中庭を挟んで奥に位置する建物主要部(拝殿)を、地上レベルから高く持ち上げている。構造は鉄筋コンクリート造と木造を合わせている



26

熊野本宮大社
創建 | 第十代崇神天皇65年(紀元前33年)
田辺市本宮町本宮 1110
全国に5,000余ある「熊野神社」の総本宮にあたる熊野三山のひとつ。なかでも熊野本宮大社は中辺路、小辺路、大峯奥駈道など参詣道の交差点に鎮座し、創建は紀元前33年といわれ、本年は御創建2050年の記念すべき年を迎える。当初は大斎原に社殿があり、今の約8倍の規模を誇っていた。現在の社殿は、水害を免れた上四社を1891年に移築したもの

